

## 県指定無形民族文化財「丹生ちゃわん祭」

### 「ちゃわん祭」のゆらい

その昔、末遠【すえとう】（余呉町橋本）という所に、陶器をつくる陶工がいて、その技を神から授けられた報恩感謝【ほおんかんしゃ】の意味から、毎年丹生神社に陶器を奉納したのがはじまりと言われてい

ます。はじまった時期は定かではないが、丹生神社の由緒書【ゆいしょ】によれば永暦年間（1160年）のころは既に盛大に行われていたと記されていますし、地域の古文書等から、室町時代から行われていたのではないかと考えられています。



### 代々受け継がれる技術と音色

山車を飾る技術は秘伝であり、三つの山車にそれぞれ選ばれた三人（計九人）の山作りたちだけに代々伝わる門外不出の技です。

身を清めた山作りたちが丹精込めて三ヶ月間もの月日をかけて飾りを作り上げます。

飾り作りは誰にも見せず、芸題すら知らされません。

村人も祭りの一週間前にある「山車見せ」ではじめて見る飾りを心待ちにしています。



また、曳山の上で、美しい調べを奏でる「しゃぎり」も古くから父から子へ、子から孫へと代々受け継がれてきた音色です。笛も家宝として受け継がれています。

譜面はなく、言葉で「ヒヒトン、ヒヒトンの「ヒ」の音はこうして出すんだよ」と長い冬に囲炉裏を囲んで稽古を重ねていたそうです。

このほかにも祭りの準備は経験者が次の世代に教え伝えながら進めるとともに、子供からお年寄りまで区民三百六十人総出で力を合わせる事によって、また、このお祭りを後世に伝えていくために祭りの開催に向けて取り組んでいます。

### 観客を魅了する山車飾り

山車の組み立てには金物ロープ等をいっさい使わず、山から採ってきた「藤つる」をねり合わせ縄やロープの代わりにして締め付けに使用して作られています。

そしてこの山車の飾りには茶わんが使われます。

しかも素焼きではなく陶器であり、昔、陶器の茶わんは高価なものでした。

山車飾りの芸題は、主に歌舞伎や戦記物、伝記伝説などの物語から採っています。

見る人たちに物語がわかるように、下人形と宙人形の間には物語にゆかりのある置物、建具、武具、道具、花鳥風物を巧みに組み合わせて作り、その高さは地上10mにもなります。

山車は寿宝山、永宝山、丹宝山と三基あり、その飾りは山車作りたちの腕の見せ所と言われています。

村人や観客を魅了し、あっと驚かせるために、互いに競い合って作ります。



また、山車の周りには村人たちが古来からの宝物として保存してきた幕を飾り付けています。

それは、京都祇園祭、飛騨高山祭りに匹敵するほどの見事な幕です。

水引幕：寛文二年（1662年）、延宝元年（1673年）、

安永五年（1776）に購入

見送り幕：寛文十一年（1671）、寛文十二年（1672）、

享保三年（1718年）に購入

### 祭りの音「しゃぎり」と「十二の役」

曳山の上で美しい調べを奏でる「しゃぎり」は、お祭りには欠かせない存在です。

笛、太鼓、鉦で構成され、祭囃子として丹生の里に親しまれています。

「十二の役」は、大太鼓、小太鼓、鉦叩き【かねたたき】、鼓打ち、ささらすり、棒ふりからなり、道中お練りと稚児の舞で囃子【はやし】をする役目です。

中でも棒振りには他の地方のお祭りにはみられません。

また、小太鼓は舞の最後に獅子を舞います。



### 中世の面影を今に残す「稚児の舞」

稚児の舞を舞う舞子は五才から十二才までのこどもで、昔は男子しか舞子になれず、しかも人数が多かったためくじで舞子を決めており、くじに当たった子どもの家族はみんなで大喜びしたそうです。

今では子供が少なくなり、女子も舞子として舞うようになりました。



稚児の舞は、どの舞も後ろ向きになり、後退りながら舞う形で、中世の舞の面影を今に留めており、県下には丹生茶わん祭りしか残っていません。棒と笛を持つ「神子の舞【ミコノマイ】」、鈴と御幣を持つ「鈴の舞【スズノマイ】」、扇と御幣を持つ「扇の舞【オオギノマイ】」をはじめ六つの舞を披露します。今回は子供が少ないことから一部の舞をやめざるを得ないとのこと。



### 「花奴」の花傘踊り

「花奴」は、頭には豆絞りの手拭いを被り、長襦袢にわらじ履き姿で花傘を手にした15、6人の若者が、練り踊ります。

その姿はまさに壮観で渡御道中の花形です。

### 山車支柱取外し

山車飾りは巡行の間、竹竿の支柱で支えられています。この竹竿は丹生神社到着後のクライマックスにははずされ、この瞬間、観客から歓声があがるほどです。高々と積み上げられた飾りが風邪にゆらゆらと揺れ、倒れ落ちそうで倒れ落ちない姿に観客は息をのみ見守ります。

そしてお祭りは頂点に達します。



引用文献

丹生茶わん祭保存会発行：丹生神社ちやわん祭

丹生茶わん祭保存会発行：県指定無形民族文化財「丹生の茶わん祭」

（財）水資源協会発行：たかとき川 VOL. 28